

ホイジンガ再論

筆者は最近ホイジンガの生涯と思想について概観したが、執筆上の種々の制約から、この歴史家についてなお論じ足りない点が多かったので、以下の小論において若干の補足をしたいと思う。

一

マルクス主義史家J・ロメインは、ホイジンガの弟子として師の歴史観に深い理解を示しながらも、同時に鋭い批判を加えたが、その論文『歴史家としてのホイジンガ』において以下のように述べている。²

「われわれのみるところ、その形式と内容とにおいて、もっともすぐれた研究であるハルネサンスとリアリズムVにおいて、ホイジンガは結論する。△新しい象徴主義、新しい観念体系、類型学、あるいは様式型態などはたいいていの場合その先駆をなしたリアリズムの中に根を下した手堅さから自己の力を引き出しているVと。……この文章において、彼はみずから意識することなく、歴史学における彼自身の意義を表明したのではないか、とわれわれは受けとることができる。△視ることと解釈

ホイジンガ再論

栗原 福也

することV zien-en-zich-rekenschap-geven としか名づけようのない才能に恵まれ、若い日に八十年代の運動（オランダにおける一八八〇年代の文学運動。芸術至上主義の立場をとり、青年、学生に圧倒的な影響を与えた。）に捉えられて、世紀の交における思想の転換を受け入れた彼は、十九世紀の△客観的なV実証主義的学問の△リアリズムVをわれわれの時代の△主観的V△象徴主義的V、様式的な学問と取り代えたのではないか。それは主観的、象徴主義的、様式的であるが、にもかかわらず先行のリアリズム、前世紀の客観主義と実証主義にしっかりと結びつくことによって確固としているのである。」（カッコ注は筆者）

ホイジンガが十九世紀の科学的客観的歴史学を批判し、歴史認識における直観や想像力を強調したのは、一九〇五年におけるフローニンゲン大学での就任講演「歴史的表象における美的要素」においてであった。比較言語学の研究者から歴史家へと変身したホイジンガは、この就任講演において、歴史を知覚することは映像を喚起することだというそれまで考えてきた漠然とした想念に明確な理論的表現を与えた。ホイジンガは

のちに「一九〇五年十一月四日の、私のフローニンゲン大学の就任講演は、とても長く、かつ重苦しいものになって、私の聴衆の大部分を甚しく退屈させた。」（『わが歴史への道』坂井直芳訳、四五頁）と書いたが、この文章は、大学時代の師であり、フローニンゲン大学への就任に奔走してくれたP・J・ブロックに代表される客観的な実証史学に飽き足らず、当時のドイツでヴィンデルバント、リッケルト、ジンメルらが行なった精神科学に対する哲学的基礎づけを援用しながら、新しい歴史観の構想に格闘したホイジンガの緊張した重苦しい気分を伝えている。

オランダにおいて初めて歴史の理論と方法を本格的に論じたこの講演は、オランダ史学界にとって画期的な意義をもつと同時に、ホイジンガ自身にとっても、その後の研究の方向を明確に提示したことによって記念碑的な意味をもつ。すなわち、論文集『文化史的認識』（一九二九年）³および『歴史学』（一九三七年）における独自の歴史観や歴史理論、あるいは文化史Vの主張はすべてこの講演の内容をさらに展開したものであるし、また『中世の秋』や『エラスムス』はこの講演で述べた理論や方法を適用したものだといえることができるのである。

このように、歴史像の形成における直観や想像力の役割を重視し、歴史認識における主観性を強調するホイジンガは、のちに「歴史の認識は、個人の精神と靈魂を基盤にそこから響き出るものでなければ生命も価値もない」（『歴史学の成立』兼岩正夫訳、一九七頁）と明言する。

一九二九年に発表した論文「文化史の課題」⁴において、ホイジンガは、十九世紀の歴史学が発展の概念を濫用し、また発展のイメージにある、内在的傾向こそ、その過程を決定づけるといふ觀念が有機体の概念と結合して一層補強されたと批判し、歴史認識における因果律の適用をきびしく制限すべきだと説く。（第二章、「発展の概念は歴史科学ではただ条件つきでのみ用いられ、しかも、しばしば混乱を引き起こし、邪魔な働きをする。」）⁵ ついで、彼は歴史的感興 *historische sensatie* あるいは歴史的接触 *historische contact* が歴史の理解にもっとも重要であると述べる。歴史的感興とは、「ある一つの世界に入ることであり、自己超越の多くの形式の一つであり、人間に許された真理体験の形式である。それは芸術鑑賞でもなく、宗教的法悦でもなく、自然の驚異でもなく、形而上学的認識でもない。が、しかし、それは群舞の像の一形態だ。こうした体験の対象は、人が眼で見ていると信じこんでいるような、個人的姿をとる人間像や人間生活、あるいは人間の思想などではない。ここで精神が作り上げ、また経験するのは、ほとんど映像と認めがたいものだ。それは形をとるにしても漂びょうとして、おぼろにも定めがたい。」そして歴史的感興は「実際には、特に精神の澄み切った一瞬に限られて働く。（邦訳、四八―四九頁）」ところで、歴史的感興はいかに重要であっても、それは一瞬に限られ、ときどき立ち現われるに過ぎず、歴史的⁶理解とか歴史的叙述はたんなる歴史的感興の体験あるいは精神の開眼よ

り以上の何物かである。すなわち歴史的感興は歴史的理解のある一部分なのである。ここで、ホイジンガは歴史的感興を永続的な理解ないし認識に高めるには、思索を通して感興に形式を与えなければならないと説く。すなわち、「それぞれの歴史作品は連関性を組み立て、形式をデザインし、その中で過ぎ去った現実を把握しようとする。歴史は概して事実を意味深長な配置に組み込むことにより理解したと納得させるものであり、ただまれに、はなはだ限られた意味で、厳密な因果関係の確認にたよることがあるだけだ。歴史がもたらす知識は、「何か」「如何に」という問いに答える性質のものであり、ただ例外的に「どういうわけで」「何故に」という問いに答えてくれる。……過去はわれわれの精神の光の下で諸形式に組み込まれるが、この諸形式の観照に意義を認めるのが歴史理解の方法である。」(五〇―一頁)

かくして、彼は文化史は形態学だと主張するが、ただし現在はまだ、一般的な形態、つまり一つの中心概念を規準にしてすべての文化を描きあげる一般形態学の段階に達していないから、さしあたって特殊形態学として、過去の諸形態の特殊な諸形式を確立する複数主義に甘んじなければならぬとする。

「歴史的表象における美的要素」で提起された美的・直観的方法是、ここでは歴史的感興と呼ばれ、歴史理解の最初の局面とされる。そしてこのような感興に形式を与えるのが歴史理解の第二の局面であって、そ

の形式は、直感によって、輪郭だけでなく、色をほどこされ、視覚的暗示をもって光を發せしめられる。ブルクハルトに鼓吹されて芸術史への関心から歴史の研究に向ったホイジンガは、バーゼル大学におけるブルクハルトの後継者ヴェルフリンの影響のもとに文化を生の実のうえに超越する形式、文化理想、生の様式として理解する。⁵ 当時のドイツで精神科学における類型的認識方法が流行していたこともホイジンガに影響を与えたことは言うまでもない。

「歴史的表象における美的要素」における美的・直観的方法の主張から「文化史の課題」における、文化史は形態学であるとする歴史観への発展はすでに『中世の秋』執筆の時期に完了していたことは、本書の内容はもちろんのこと、その副題「十四・五世紀におけるネーデルラントおよびフランスの生活と思考の諸形式」が示す通りである。それと並んで、たとえば第十一章「死のイメージ」にもっともよく示されているように、本書には象徴主義的方法―シンボルによる理解―が見事に用いられている。⁶

以上においてわれわれはロメイが指摘したように、ホイジンガがいかにして十九世紀の△客観的な△実証主義的学問のリアリズムを現代の△主観的△象徴主義的△様式的な学問と取り代えたかをみた。⁷

さて、一九二九年に發表された短い論文「歴史という概念の定義について」(邦訳題名「歴史とは何か」)⁸において、ホイジンガは「歴史と

は文化がその過去について解釈をする形式である」という有名な定義を与えている。ところで、この定義には、「文化史の課題」において、歴史理解にとってもっと重要であるとされた歴史的感興については言及されていない。一九〇五年の講演においては、過去のすぐれた芸術によってひきおこされる映像はもっとも精巧な思想構成よりもさらに精妙なものでないかと述べたホイジンガは、いまや、「すべての文化は、それぞれ独自の歴史の形式を作り出すのであり、作り出さなければならぬい。」(邦訳、一二五頁)「我々の文化に適合した歴史は、ただ科学的な歴史だけである。近代の西洋文化が世界のできごとについて知る形式は批判的科学のなものである。我々が科学的な良心を求めない場合には、我々是我々の文化の良心を傷つけることになる」(一二七頁)と述べ、彼の歴史観は一見かつての非合理的な、直観的要素を強調する立場から合理的・客観的立場へと変貌したような印象を与える。そのような印象はすでに「文化史の課題」においても否定できない。すなわち、この論文で、彼は第二章において十九世紀の歴史学を批判したのち、本論とも言ふべき第四章(「文化史の主要課題は個々の、現実の過程に則して、文化を形態学的に理解し、表現することである。」)に入るに先だち、本来の論旨から言えば廻り道とも言える第三章(「もし、広汎な教養ある読者のための歴史叙述が、文学的要求から生まれ、文学的手法によって作り出され、文学的效果をねらう美学かぶれの感情的歴史の手中に落ちこん

だなら、それは、われわれの文化にとって災いとなるだろう。」)を設け、当時流行していた歴史的美文学、ことにロマンチックな伝記(vie romances)に対して、むしろ論争を好まぬホイジンガにしては珍らしく、かなり激しい調子で攻撃を加えた。すなわち、これらの歴史的美文は広汎な読者層を満足させようとする出版者と一般的な知的、感情的傾向に譲歩する著作家たちによって作り出される。そして一般の読者は十八世紀のセンチメンタリズムの近代的焼き直しである情熱と感情を崇拜する。民衆はつねに反ストイックで、激しい感情のほとばしり、さしぐむ涙のしずく、胸もはりさける感動のうねりなどはつねに彼らの心のせきを切って流れ落ちる。ところで、文学的造形においては、奔放な精神充足感、構想の自由、無限の暗示の可能性などによって、学問が説明しようとしないうか、恐らくは説明しえない宇宙的あるいは人間諸関係の謎が解明されるのに反して、歴史学はつねに「真実」つまり、実際にそうだったのかという問いに重点がおかれる。したがって、歴史家の一般的态度は禁欲的、つまり表現形式はつねに謹厳で慎しみ深く、かつ真剣でひたむきな誠意を持たなければならない。

「歴史的表象における美的要素」や『中世の秋』と一九二九年の『文化史的認識』に表われたホイジンガの歴史観にはたしかに微妙な相違、あるいは力点の置き方の違いがみられる。オランダにおけるホイジンガの批判者は一様にこの点を指摘し、それをホイジンガ史学の墮落あるいは

は下降であると批判した。たとえば、ファン・エイクはつぎのように述べる。ホイジンガの『中世の秋』が出た時、文学界の批評家たちは非常に歓迎をしたのに反し、歴史家たちは「不信の念を抱いて」、「ホイジンガにとっては辛い控え目」をもって迎えた。この控え目は「非学問的という一種の疑惑を呼び起こさずにはいなかった。」「彼のその後の態度は明白に、この体験によって決定された。」すなわち、その後、彼は常に批判的学問的ということ強調して、専門家の不満を和げ、また繰り返し偽歴史(例の歴史的美文学)を攻撃して専門学者として自分の立場を強化しようとした。つまり彼は自分の持つ最良のものを否認した。テル・ブラークはホイジンガを教授と詩人、あるいは「口述と夢」の二重性において捉え、ホイジンガが空想から離反し、彼の持つ最善の能力を否定し、彼の心をうわべだけの大学の飾り物に質入れたと述べる。テル・ブラークはまたホイジンガが用心深く自己の安全を求め、たとえば「さしあたって複数主義者」であることを表明し、結局、伝統的な客観主義的歴史に還帰したと批判する。⁹

ロメインは言う。ホイジンガは『中世の秋』のち、「疲れ切ってしまい、彼の視力はもはや描写するだけの力をもたず、彼の能力はもはや建設するだけの力をもっていない。」「ルネサンスの問題」でブルクハルトのルネサンス観を打ち破りながら彼自身の積極的ルネサンス像を描かなかった。『中世の秋』と対をなす『近代の春』はついに実現しな

ったと。¹⁰ロメインはまたつぎのように述べる。ホイジンガが経験した一九〇〇年頃の思想の転換はまさに十九世紀の合理主義によって非合理的価値を説明しようとするものであった。この思想の転換はフロイトとベルクソンの業績に恐らくもっともよく現われている。フロイトの『夢の解釈』、ベルクソンの『笑い』はちょうど一九〇〇年に発表され、ともに、夢と笑いという人間における非理性的なものを合理的に理解しようとする試みにほかならない。ホイジンガはこれら二人の著作を理解しようとはしなかったが、フロイトやベルクソンと同じく、客観主義から主観主義へ、決定論から主意主義へと転換したウィリアム・ジェイムズの『宗教生活の諸相』(一九〇二年刊)に導かれ、歴史学において同様の試みを追求したのである。しかしながら、のちになって、ホイジンガが非合理主義の隆盛を嫌悪して激しく非難したのは、まさに彼自身が、歴史学の分野において二十世紀の思想の誕生をおし進めた指導者の一人だったからではないか。換言すれば、フロイディズムや歴史的美文学やナチズムに対する激しい攻撃の下には、無意識の罪の意識つまり、あたかも自分の呼び出した人物を追いかけることができなくなった魔法使いの後悔にも似た気持が隠されているのではないか。もはや追い払うことができないにもかかわらず、ホイジンガは『明日の影の中で』においてそのような試みをした。ちょうどベルクソンが『道徳と宗教の二源泉』で同じ試みをしたように。¹¹

二

ホイジンガはこれらの批判に対する答えにおいて、批判者たちは「私という人間の心理に注目を向けたが、それは、私の作品を判定するのに必要な程度を越しているよう思える」と述べているが、¹²ホイジンガの歴史観がとりわけホイジンガその人のパーソナリティと深く結びついていることはホイジンガを論じるすべての人が認めるところであるから、¹³ホイジンガ史学を理解するためには彼の意識や心理に立ち入ることもやむをえないことであろう。

以上にあげた三人のホイジンガ評ないし批判に比べて、P・ヘイルの『時代の告発者としてのホイジンガ』におけるホイジンガ観は筆者のみるところ、もっとも周倒でかつ妥当なものであると思われる。¹⁴たとえばヘイルは、ホイジンガが『中世の秋』以後、専門家としてみられたために想像力から離反したとするファン・エイクやテル・ブラークの説を論外だとしりぞけ、またレイデン大学教授、雑誌『案内者』の編集者として保身の術を求めるホイジンガが王女ユリアナ（現女王）に名誉博士を授与し、女王の在位四十周年を記念する讃辞を新聞に寄稿したことを批判したテル・ブラークに対してつぎのように述べる。ホイジンガはユリアナ女王の学位授与式に、学問の尊敬に価しない講演を行なったし、ウィルヘルミナ女王在位四十年の記念には、第一次世界大戦中最善の責

任を果たした女王のお蔭で、オランダ国民が安全に誇り高く戦争を切り抜けることができた、と歴史家としてふさわしくない讃辞をつらねた。たしかに彼の態度にはテル・ブラークのような誤解を生む原因がひそんでいる。「しかしながら」とヘイルは言う。

「ホイジンガの文化理想はエリートのそれだった。エリートはエリート特有の精神のみならず、社会的態度をも持っている。彼は社会の一員として、自分の属する階層に安んじており、忠誠と言う高貴な行為を愛した。……彼はその階層の慣習を尊重し、信念をもって、すすんでその伝統に従った。彼が書きかつ話した多くの祝辞・讃美はつねに美しく、また最小限の抑制も批判もみられない。」「彼の著作『ホモ・ルーデンス』において、ハバロックに特有な誇張への要求を創作意欲のもつ濃厚な遊びの色合いからのみ理解すべきだ」と述べたホイジンガは、その実例として、グロチウスがフランス王ルイ十三世に捧げた『戦争と平和の法』の献辞、すなわち至るところで礼讃される国王の正義をもっと誇張した表現ではめたたたえた献辞をあげている。ハグロチウスはこれらすべてを本気で考えていたのだろうか。それとも、偽っていたのだろうか。——彼は時代様式という楽器を掻き鳴らして遊んでいたのだ、とホイジンガは言うのである。このことはホイジンガについても言えるのではないか。だが、彼が考えている時代様式はどうにもならないほど時代遅れなのだ。¹⁵」

ヘイルは『時代の告発者としてのホイジンガ』において、ホイジンガの現代文化批判の誤りを容赦なく批判し、その誤りがホイジンガの思想的特質から生じたと説く。ヘイルが現代文化に対するホイジンガの攻撃を批判するとき、現実主義者ヘイルの側面が押し出されて説得性を持たないが、ホイジンガの思想を分析するときにはよく行き届いた温い考察をしていると思う。ホイジンガの息子でジャーナリストのレオナルドはヘイルの批判に対し父親の弁護論を書いて『歴史学雑誌』Tijdschrift voor de Geschiedenis に送ったが、編集者のファン・ディレンに掲載を拒否されたことに憤激して『わが父の回想』を書いた。¹⁶レオナルドは、父親ホイジンガがドイツ軍の強制収容所で、レイデンの解放記念日にオランダの独立戦争を回想し、祖国オランダの永遠であることを収容所の仲間にした¹⁷に、この時一緒に収容所にいたヘイルは一体何をしたらかと憤激しているが、筆者にはヘイルがホイジンガの批判者としての節度を越えているとは思われない。

さて、ホイジンガは自己の批判に答えた『歴史学』の付録においてつぎのように述べる。「私の衷心からの確信によれば、歴史の思考活動はすべて、常にいくつかの二律背反の間で行なわれるのであり、そうした二律背反の中の第一、すなわち、主観的——客観的という二律背反が、今話題に上ったものである。……理性による理解と直観による理解との二律背反、名目論的な見方と実在論的な見方との二律背反、いやそれど

ころか、貴族主義的と民主主義的原理との二律背反も同列に入るのである。¹⁸「ヘイルはここに語られたホイジンガの思想こそ、ホイジンガの基本的な精神的態度をもっともよく示しているものだと考える。そして、ホイジンガがケルンカンブを回想した文章において、ケルンカンブと彼みずからの精神形成期である世紀末の精神的雰囲気述べたつぎの箇所注目する。「ケルンカンブ自身、我々の文学の革新を宣言し導入した（八十年代の）世代に属していた。私は彼よりも八歳の年少だけれども、当時のオランダの若い世代が成熟して行った精神的雰囲気は、私も十分に熟知している。芸術および文学に関する我々の新しい支配者は、我々に原理を刻印したのであって、我々はそれを熱情的に信奉して憚らなかった。厳密にいうと、我々の精神は、妙な、解けやらぬ対照の中に生きていたのであった。芸術および文学に対する無際限の崇拜には、なんらかの学問軽視が含まれていて、この崇拜が激しく我々を捉えた。……極度の精神唯美化は、しかしながら、勉強および研究への集中的な個人的な没頭をかたときでも妨げるものではなかった。」（傍点は筆者）。¹⁹ヘイルはホイジンガがここで述べている、彼の青年時代の妙な、解けやらぬ対照——矛盾——二律背反をホイジンガのもっとも特徴的な精神的態度であると考えるのである。²⁰ホイジンガは彼が想像力から離反してアカデミズムに逃避したという非難に対して、「²¹学問的でないという疑い²²を一度だって苦にしたことはない。私は与えられるままに活動し、書く」と

述べたが、²¹ヘイルはこの言葉を引用して、彼の著作、彼の思想、彼の人生観は、その批判者が考える以上に、彼の深い本質と結びついていたのだと主張する。

かくして、ホイジンガの批判者たちは、ホイジンガにとってその歴史観が理性と直感、客観的と主観的の二者択一の問題であったとして論じるが、ヘイルはホイジンガ史学理解の鍵が両者の矛盾的並存として把握することにあると説く。たとえば『歴史的表象における美的要素』において、ホイジンガはその題名が示すように直感と想像力を歴史的認識の一つの構成要因 (bestanddeel) として重視すべきだと主張しているもので、決して理性的要因を無視しているのではない。彼の多くの作品は精神の柔軟さと冷静さを保ち、とりわけ、イメージと批判が緊張関係において結合した時、「ルネサンスの問題」のような最良の魅力的な作品が生まれるのであると。

『わが歴史への道』は学問的著作ではないけれども、にもかかわらずこの書物において、晩年のホイジンガがいちじるしく主観性に傾いていたことをヘイルは指摘する。「歴史的なるものは……着実な、正常な学問的関心というよりもむしろ一種の執念であり、魔力であり夢であった。私の少年時代からいつもそうであったように。」(邦訳、三四頁)とか、「ダムステルディープに沿って、あるいはその近く、そのような散歩のとき、ある日曜のことだったと思う、一つの洞察が私にひらめいた、

——すなわち、きたらんとするものの告知としてではなく、過ぎ去るものの枯死としての後期中世。」とか、「私の学問的、文筆的活動は、私自身の意識にとつては、格闘の性格を持ったことは一度もない。私の研究や著作の対象となったものが克服せらるべき問題として私の前に現われたことは、いまだかつてない。」という箇所などはホイジンガのディレクタンティズムあるいは professionalism の欠如 (R. L. Colie, Johan Huizinga and the task of cultural History, p. 622, American Historical Review, LXIX, No. 3, 1964) を示すものとされるが、ヘイルは晩年のホイジンガにおける強度の主観性に帰するのである。

歴史理論に関するホイジンガの著作がややもすれば論理の一貫性と厳密性に欠けるところがあるのは多くの人が指摘するところである。ホイジンガは「認識論的方向に深入りすることは、当時も、またその後も、ついで私の意図するところではなかった」(『わが歴史への道』、四五頁)と述べ、またオランダ精神は哲学的ではなく、定義への欲求は少ないし、明晰な論証の欠如を非難されても仕方ないことだと述べるが、ヘイルは矛盾に満ちたホイジンガの精神態度にこそ論理の一貫性や厳密性の欠如の原因があると考えるのである。

さて、以上のようなホイジンガの歴史観や思想を考えるのに当って、ヘイルの指摘する重要な点をあげたいと思う。それはフランスの哲学者セイエールのホイジンガへの影響である。第一次大戦およびその解決と

してのヴェルサイユ体制にヨーロッパの知識人は絶望した。ホイジンガもその例外でなかったことは、一九二一年に発表され、シュペグラールとウェルズを論じた「天使と闘う二人」を一読すれば明らかであろう。²²ところで、同年、ホイジンガは「エルネスト・セイエール」なる小文を『案内者』誌上に発表している。²³セイエールは一八六六年、パリ生まれの哲学者で、フェルディナント・ラサルおよびドイツの社会主義を研究したのち、世紀末から続々と著作を発表した。ホイジンガによれば、「セイエールの精神は、その文体からみて、強烈かつ柔軟で、剣士を思わせる。彼の特徴である貴族性はトクヴィルを思わせるがトクヴィルほど瞑想的ではなく、より積極的で、はなはだ皮肉かつ諷刺的である。その著作の題名が示すように、彼は何よりもまづ反浪漫的である。彼の精神は、禁欲的、実際の、論理的かつおそらくはそれほど形式主義者ではないという意味において、古典主義的と呼ぶことができる。²⁴」

ところで、セイエールの思想体系は imperialism, mysticism, raison の三つの概念によって構築される。ただし、これらの三概念は、普通の用法とは異なる、彼独自の意味を与えられているのである。彼はアンペリアリズムを人間行動のもっとも基本的な推進力と見なす。それは各人の本性に根ざすところの、外界に対して自己を表現しようとする衝動、すなわち支配しようとする衝動である。この拡張への欲求は、ホッブスが「所有欲」、ニーチェが「権力への意志」と呼んだものであ

て、自己保存本能に必然的に随伴する欲求であり、あるいは、自己保存のための条件や前提として、知性が支配や拡張を命じるときに、本能の形態である。このように解することにより、アンペリアリズムは個人にも集団にも矛盾なく適用され、通常の政治的意味をも包摂するばかりでなく、戦争、征服、商工業、言葉、芸術的創造、呪術などによる各種の力の獲得を意味することになる。²⁵

つぎに、ミステイシズムとは、個人と集団とを問わず、あらゆる偉大な人間的努力にみられる信念、すなわちそのような努力を支え、正当化する超自然的あるいは超論理的な力を意味する。ミステイシズムによってアンペリアリズムは非合理的になり、理性による中庸、抑制、正しい考量というような規範の要求に応じられなくなる。近代の精神生活のすべての領域においてはミステイシズムと呼ぶべき非合理的信念が軸になり出発点になっている。かくして、八人種のミステイシズムすなわち国家的帝国主義があり、八社会的ミステイシズムすなわち階級的アンペリアリズム、ことに社会主義があり、八情熱のミステイシズム乃至八審美的ミステイシズムすなわちロマンティシズムがある。ミステイシズムはアンペリアリズムに対して適度に作用するとき、健全だが、過度になると健全なアンペリアリズムも非合理的になり、文化は墮落する。十八世紀末以来、ヨーロッパの思想、社会、倫理、芸術、政治の領域においては、このような非合理的ミステイシズムが支配してきた。さ

さまざまなアンペリアリズムは、そのほとんどが、感情という動きやすい基礎の上にうちたてられ、アンペリアリズムを健全ならしめ、文化に正しい方向を与える理性はくまされた。

さて、最後のレーゾンとは抽象的理性ではなく、蓄積された人類の経験あるいは個人と集団の総合された経験を意味する。つまりそれは絶えず修正されながら、生き生きと創造され続ける伝統の中に圧縮されている社会的経験であるから、盲目的な伝統主義ではなく、長い間の知恵に対する大いなる尊敬、諸制度——その制度のもとでアンペリアリズムが正しく健全であるような、永い間続いてきた制度——への深い畏敬なのである。

セイエールはアンペリアリズムとミスティシズムが強くなり過ぎ、レーゾンが衰弱していることに近代文明の病患を見、ペシミズムから脱する唯一の道はレーゾンへの信頼以外にはないとする。彼の研究は次第にルソーに集約してゆき、ミスティシズム——ロマンティシズムと言ってもよい——の種々の形態はルソーに発し、西欧文化をいよいよ危険に陥としいれつつあると説く。

ホイジンガはセイエールがミスティシズムの三つの形態、ナシヨナリズムと社会主義と芸術至上主義を西欧文化没落のもっとも危険な要因であるとする結論を誰も否定できないであろうと述べる。彼はまたセイエールが西欧文明の病患に対して憂慮すべき診断を下したにもかかわら

ず、そのプラグマチズムのゆえに樂觀主義者であったことを指摘している。セイエールによれば、「道徳的樂觀主義はつねに、人間の善に対する努力を鼓舞するために、心理的な悲觀主義を補整するに違いない」のである。²⁶ ホイジンガはこの小論の結論においてつぎのように述べる。「希望を持ちうるだろうか。一方で、感情の優位、他方で文明の機械化という二つの影響のもとに、人類の思考力はあまりにも衰弱し過ぎたというのではないだろうか。もっとも、恐るべき文明の機械化という現象はセイエールの体系には説かれていないように思われる。われわれの社会は安価で大衆的な印刷物でみち溢れている。……精神は大衆化され、われわれの貧弱な頭脳はもはやこの世界に堪えられない。唯一の救いは再び文化を強力に吸収することしかないように思われる。すなわちわれわれの觀念の世界をすべて、抑制し、簡素化し、きびしい形態に戻すことである。西欧の人びとは、……文化の簡素化をみずから実現するため、その精神を充分に抑制するだろうか。それともカタストローフが生じるだろうか……」と。²⁷

第一次世界大戦がヨーロッパにもたらした大規模な生活と文化の破壊に直面して、多くの歴史家は、絶望の深淵から、飽くまでも学問的な探求を通じて、ヨーロッパ文化の将来への希望を探り、確信をえようとする。たとえば、ホイジンガの尊敬するウィーンの歴史家アルフォンス・ドープシュは戦争直後『ヨーロッパ文化発展の経済的、社会的諸基礎』

二巻を発表し、ずたずたにきりさかれた戦後ヨーロッパの統一を、ゲルマン民族の侵入によるヨーロッパ世界の崩壊に比定し、ゲルマン諸族による旧ローマ文化の継承と、新しい中世文化の創造を説き、たんに古典古代と中世のみでなく、先史時代から現代に至る数千年の文化の連続性を確信しようとする。

一九一五年のレイデン大学における就任講演において、ホイジンガはデモステネスのように嵐の中で叫ぶことは歴史家の役目ではないと聴衆に訴えたが、戦後文化状況への絶望の中で、彼は絶望からの脱出を模索してエルネスト・セイエールの歴史哲学を発見する。かくて、ホイジンガにとって、戦後の危機状況は戦争の直接の結果であるよりも、一方で、理性に対する感情の優位、判断力や批判的理性の衰弱、生の礼讃や倫理規範の喪失、過度の浪漫的傾向、芸術至上主義などに現われた西欧文化の墮落、他方、それと並んで産業革命によって急速に進展してきた技術化と組織化、大衆社会化の帰結であると考えられるに至った。危機の原因を技術化・組織化・大衆社会化に求める思想はその系譜をトクヴィル、ブルクハルトにまで溯ることができるが、直接には、一九一七年に発表したアメリカ研究『アメリカの人間と大衆』の成果であった。

一九二一年以後に発表されたホイジンガの歴史観と文明批評の枠組と主要モチーフの多くを、書評の形式で書かれたこの小論「エルネスト・セイエール」において、われわれはほとんどそのまま見出すことができる。

ホイジンガ再論

る。一九三五年に発表された「明日の影の中で」は、この書評の拡大版と呼んでも差し支えないほどで、そこでは、現代の精神の病患の診断Ⅴが行なわれ、病患から回復するための処方箋として精神の浄化、禁欲と簡素化が説かれているのである。最後の著作『汚された文化』においても同様の視点から現代文化の分析と批判が行なわれ、文化回復への条件と方策が模索される。これらの著作において、彼は現代文化の墮落を示すナショナリズムと社会主義のみならず芸術至上主義に対しても激しい批判を加える。「文化史の課題」第三章において、歴史的美文学を強く非難して、理性的立場を強調し、貴族主義的立場とストイシズムを主張したことに、われわれは、ホイジンガに与えたセイエールの歴史哲学の影響をみることができる。その結果、ホイジンガがさまざまな批判を受けたことは前述した通りである。一九二四年に発表された『エラスムス』においても、ホイジンガはエラスムスの理想が簡素、純粹、節制によって死に瀕した中世文化を新生させることにあった、と考えた。ここにもセイエールの思想がホイジンガの思索に与えた影響のあとをみることができないだろうか。

ホイジンガは『わが歴史への道』で若い日に「八十年代」の運動つまり唯美的文学運動に熱狂したことを大いなる過りであったⅤと述懐しているが、息子の語るところによれば、若いころ、ホイジンガは前衛的な文学、芸術を愛好したが、後年にはかなり保守的になり、二十世紀の

芸術には否定的な評価を与えた。彼には芸術家の自己顯示と超世俗的ポーズにみられる傲慢さ、——彼は傲慢と怒りをもっとも嫌った——を嫌悪したのである。彼は普通人と芸術家の間に境界線を引くこと自体間違っている、もし区別するとすれば、両者の唯一の相違は、前者が自己を表現し、感動を伝える資質を持っているということだと考える。芸術家はもっとも傲慢な者ではなく、この社会のもっとも心貧しき者でなければならぬ。²⁹このようなホイジンガの芸術観を、われわれは、かつて八我々を取り巻く世界は、本当のところ、まことに大きく美しいことを、いつも忘れないでいようV（「歴史を描く心」三三頁）と述べたホイジンガが、第一次大戦の深いショックを受けて、審美主義から、理性を重視し、ストイシズムを説くに至った経過のうちにおいて理解することができる。にもかかわらず、この八挫折した審美家V（ヘイル）は審美家たることを放棄したわけではなく、ホイジンガの精神的態度は一貫して不変であった。つまり、ヘイルの言うように、セイエールの、禁欲的・理性的・反浪漫的教説は、本来、ホイジンガの精神的特質のある部分と合致していたのであって、同時に、彼の精神には審美的要求がそれらと並存していたのである。ちなみに、上述したホイジンガの芸術観のうちに、十七世紀のオランダ絵画の市民性——たとえば一介の画工に過ぎなかったフェルメールを想え——に圧倒的な共感を寄せた彼の心の秘密がうかがえる。

さて、歴史家、文明批評家として、ホイジンガは彼の時代にとって一体何であったか。ヘイルはつぎのように述べる。「八ホイジンガは思想家ではなかったVとロメインは述べた。たしかにホイジンガは、その思索をもって新しい領域をきり拓き、発見した思想から、よく関連づけられた体系を構築するという意味における思想家ではなかった。……ホイジンガは思想家ではなく、新思想の紹介者 *remueur d'idées* であった。彼が鋭敏に識別し、すぐれた解釈をし、すばやく使いこなしながら、觀念の世界において活動するさまを眺めるのは楽しく、印象深い。わがオランダの歴史家にとっては稀有のことであるから、その光景は一層魅力的だ。しかし、ホイジンガが一年ごとに、ときに同一の論証において矛盾におち入っていることは、すでにわれわれの観察してきた通りである。」

ケーギのホイジンガ論の結論もほぼ同じである。「彼（ホイジンガ）のオランダ人の友人が言うところによれば、彼は人類に方向を与えるような新しい光を点じて燈火をかかげたことはなかった。しかしながら、彼はおそろしく、古い、忘れられているものを再び見ることができるようにしたのではなかったろうか」と。

ホイジンガにおける経済的・政治的認識の欠如と、過去を美化し、現代文明に対して（ことに大衆化に対して）反感をもつ彼の精神態度、これらの二つがホイジンガの現代文化への認識を誤りに導いたとヘイルは

批判した。ロメイもホイジンの現実への無知と無関心を指摘する。たとえば、ホイジンの説くストイシズムや簡素化をヘイルはあまりにも非現実的な幻想に過ぎないとするが、果してそうであろうか。大衆社会・情報化社会の成立に伴う文化の変質と下降、そのような現代の社会現象としてのファシズムの問題、あるいは公害や遊びと文化との関係などホイジンの提起した問題は現代の文化と社会におけるもっともアクチュアルな問題であるし、技術と組織の巨大化と深刻な公害に行きつまった現代において、ストイシズムや簡素化による自己変革という考え方はいよいよアクチュアルな思想になりつつあると思う。

かつて『中世の秋』において、ホイジンがファン・エイクを中世末期の精神の極点であり、その完璧な開花であると考え、そのファン・エイクの芸術が鋭い現実凝視と技巧の冴えによって、同時に近代を告知していることを洞察したことを、われわれは思い出したい。西欧文化の伝統のもっともよき理解者であり、擁護者であったホイジンが、同時に来らんとする文化をもっとも鋭敏に識別し、洞察することができた秘密をそこに発見しないだろうか。

註

- 1 拙著『ホイジンガ——その生涯と思想』潮新書、一九七二年。
- 2 Romein, J.: Huizinga als Historicus, in *Tussen Vrees en Vrijheid*, Amsterdam, 1950, pp. 212-241.

ホイジンガ再論

- 3 Huizinga, J.: *Cultuurhistorische Verkenningen*, Haarlem, 1929.

「文化史の課題」、「ルネサンスとリアリズム」、「オランダ文化へのドイツの影響」、「歴史とは何か」、「ダンテにおける死の形姿」、「ロマン主義の諸テーマについての小さな対話」の諸論文を含む。

- 4 De Taak der Cultuurgeschiedenis in *Cultuurhistorischen Verkenningen*, pp. 1-85. なおこの論文は一九二六年に「歴史学協会」大会で行なった報告に加筆して発表したものである。邦訳『文化史の課題』里見元一郎訳、東海大学出版会、一九六五年、一一八一頁所収。

- 5 カルロ・アントーニ著、讃井鉄男訳『歴史主義から社会学へ』、未来社一九五九年、二二五—六頁。なお拙著、九一一頁。

- 6 堀越孝一「中世ナチュラリズムの問題」(史学雑誌七三編、三、四号、一九六四年)、「史料の理解」(『現代歴史学入門』、有斐閣、一九六五年一一—一三一頁所収)参照。

- 7 ホイジンガは学派も後継者も作らなかった。このことはホイジンガの個性——芸術的直感力や想像、および過ぎ去った歴史や文化に対する連想・感情移入など——の偉大さ、他の追隨を許さない非合理的能力に帰せられている。また彼の弟子が語るように、ホイジンガはみずから選んだ友人たちとの交友を深め、彼を選んだ人たち(弟子)に対しては必ずしも心を開かなかったからかも知れない。しかしながらホイジンガの著作を彼の偉大な芸術的天分にのみ帰せず、学問的・方法的見地から検討し、十九世紀末から二十世紀にかけての史学史の発達の中に正当な位置づけをする必要がある。堀米庸三氏の「ホイジンガの人と作品」(『中世の秋』、中央公論社、所収)はそのような最初の試みである。

- 8 Over een Definitie van het Begrip Geschiedenis, in *Cultuurhistorischen Verkenningen*, 1929. 邦訳「歴史とは何か」(ホイジンガ選集 3『歴史を描く心』兼岩正夫訳、河出書房新社、一九七一年、一一五—一三〇頁所収)

- 9 「歴史学の成立」(『歴史を描く心』一三二—二二四頁)の付録(同書二二五—二三八頁)参照。
- 10 Geyl, P.; Huizinga als Aanklager van zijn Tijd, Amsterdam, 1961, p. 34.
- 11 Romein, J., p. 218. これらの批判に対するホイジンガの反批判は「歴史学の成立」付録を参照。なおホイジンガの親友フアルケンビュルフ『ヨハン・ホイジンガーとその生涯と個性』、アムステルダム、一九四五年、およびホイジンガの次男レオナルドの『わが父の回想』、ハーグ、一九六三年はこれらの批判を充分に意識して書かれている。
- 12 「歴史学の成立」付録、二三三頁。
- 13 ホイジンガの思想形成については拙著で扱った。
- 14 Geyl, P.; Huizinga als Aanklager van zijn Tijd, Amsterdam, 1961.
- 15 Ibid, pp. 174-175.
- 16 Huizinga, P.; Herinneringen aan mijn Vader, Den Haag, 1963.
- 17 「ライデンの解放記念日の講演」『わが歴史への道』、坂井直芳訳、筑摩書房一九七〇年、一八三—二〇〇頁所収。
- 18 「歴史学の成立」付録、二三二—二三三頁。
- 19 「G・Wケルンカンフ」(『わが歴史への道』、二六六—二八二頁所収)二七三頁。
- 20 ホイジンガは「歴史とは何か」において「歴史は、文化がその過去について解釈する精神的形式である。」と定義し、この定義は「歴史認識の概念的性質と直感的な性質との間のシレンマから抜け出す道を開いてくれる。」(一二九頁)と述べる。
- 21 「歴史学の成立」付録、二三五頁。
- 22 「天使と闘う二人」(ホイジンガ選集3『歴史を描く心』三九—一一四頁所収)
- 23 Huizinga, J.; Ernest Seillière, in De Gids, LXXXV, 1921, IV, pp. 151-159. (V. W. IV, 370-377). この小論はR・シルアン著『フランスの新歴史哲学—国民教育の歴史的・批判的基礎』パリ、一九二一年の書評である。
- 24 Ibid., p. 371.
- 25 「十九世紀末までのヨーロッパ史における愛国心とナショナリズム」(ホイジンガ選集2『あしたの隣りの中で』一七五—二六六頁所収)におけるナショナリズムの概念を、ホイジンガはセイリエールの説く度を超えたアンペリアリズムの意に解する。
- 26 Huizinga, J.; Ernest Seillière, p. 376.
- 27 Ibid., p. 376.
- 28 増田四郎「ヨーロッパの史観と発展の問題」(『ヨーロッパ社会の誕生』一九七二〇八頁所収)参照。
- 29 Huizinga, P.; Herinneringen, p. 115.
- 30 拙訳「ホイジンガ著『フランダースの世紀』創文社、一九六八年参照。
- 31 Geyl, P.; p. 42.
- 32 Kaegi, W.; Das Historische Werk Johan Huizingas, Leiden, 1947, p. 37.
- 33 Geyl, P., pp. 4~17.
- 34 Romein, J., pp. 219~222.